

一 社会生活

私たちの生活にハレ(晴)とケ(曇)があることは、「はじめに」でふれた通りである。この項においては、主としてケの生活(ふだんの生活)について見てみたいと思う。

生活の最小単位は家であるが、一般に単一の家だけで生活をするということではなく、複数の家が集まってムラ(集落)を構成し、社会生活の単位となっている。

家の生活における衣食住には、ハレとケの両面があつて、元来はその違いが最も明白にあらわれる性質のものであつた。ハレとケのけじめが次第になくなりつつあるのが、今日であるが、晴着ということばはまだ生きて使われている。食物の場合は、ハレとケの差がなくなつてきたといえよう。もとはハレの日の飲食物であつた酒や赤飯、餅など、いつでも好きなときに食べることができるようになつた。

住まいにおいては、雨露が防げればいいという基本的なことから、快適な生活ができるようになると大きな変化をしてきた。なかでも火と水の確保が容易になつたことである。

ケの生活において、重要な働き手であつたのは女性である。女性は男性と同等に田畑で働き、その上に、食事をつくつたり、衣服の調整など家事労働いっさいを行うということが一般化されていた。このような過酷な労働は女性たちの肩に重くのしかかり、慣習化されていた。

(一) 集落

市町村において、行政、生活の単位となつている集落を「部落」と称している。部落ということばは明治以降の行政文書で集落を指す用語として用いられていた。基本的には家々の維持存続に不可欠な生産と生活を共同で行う社会的まとまりの範囲をさしている。

近年では部落にかわつて集落とか地区ということばが使用されるが、定期的に行われる「農業センサス」では、農業集落について

一般に通称する農村の部落に近いもので、一つの社会集団ではあるが、住宅団地のような社会集団とは異なり、生産と消費とが未分離の状態にある人々たちが地縁的・血縁的に結びつき、農業生産活動と生活の場として自然につくりあげてきた地域の社会集団のことである。農業集落は、地域社会としてある限定された範囲をもっており、隣接する他の農業集落の範囲と区別されているのが一般的である。(一九七〇年世界農林業センサス)⁽¹⁾

と定義されている。

集落も同じことであるが、ここでは部落、集落、地区などと表現される共同生活の単位となる語として、集落と表現する。

正月・五月・九月という季節の変わり目に、
大般若だいほんにやという祈禱きとう行事を行っている集落がある。そ
して祈禱札を集落の出入口に立てる。これは外部か
ら集落の内へ邪悪なものが入ってくるのを防ぐため
である。古来より集落の外部というのはある意味で、
あの世であり、集落の内部がこの世であるという思
想があった。集落の境界となるべき所に結界けっかいの印と
なる祈禱札を立てたのである。

1 集落の構成

集落は部落長、公民館長、会計の三役と評議員を中心にした運営のための機構をもち、集落の構成員を集めて
寄合を開いて集落としての意思を決める。生活・生産に必要な道路の管理、灌漑かんがい用水の配分、それらの維持のた
めの補修、清掃などの共同労働を実施する。また冠婚葬祭や接待贈答のやり方など、さまざまな生活上の問題に
ついて申合せをし、集落を統一している。寄合のうち、年に一度行われる総会は、オーコワイ（杓割り）といい、
一般には全戸の戸主の参加により、役員を選び、行事などを決めていた。集落の運用にかかわる費用としての役
員手当、共有施設の建設や修理費、行事費などは、集落内でまかなわなければならないので、部落費として各戸

より徴収して当てられた。それら一年間の会計報告を村算用むらざんようという。

集落内には統一の象徴として氏神（鎮守）や堂宇がまつられ、祭祀組織さいしそしきをつくり祭礼や各種の祈禱行事を行う。
さらに若者組（青年会）や子ども組その他の年齢集団、伊勢講や庚申講・英彦山講などの講集団、三夜待ち、六
夜待ちなどの仲間が組織された。また新しくは老人会・婦人会・子どもクラブなども組織され、集落の活動の一
翼を担っている。

集落の最末端の単位が組・班といわれるもので、近隣をもって班を構成している。江戸時代にあった十戸組の
延長で、名称のように近隣一〇戸ほどをもって組をつくり、治安の維持、納税などの連帯責任をはじめ、日常生
活の重要な部分において密接な関係を持っていた。その名残とおもわれるが、久富東では現在、班と呼んでいる
が以前は、十戸じゅうこと呼んでいた。

現在の組につけられている名称は、集落内の相対的位置によって名付けられているものが多く、名称に上・
中・下、東・西・南・北などとつけられている。

搦 西―中折・小屋内・新地

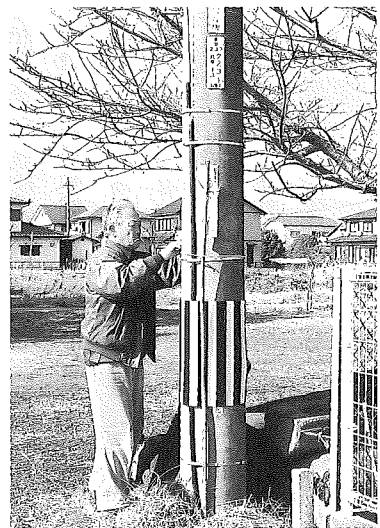
搦 東―中の折・七軒家・東新地

新 田―大籠・中小路・西組・土井の上

下新ヶ江―北ノ折・東ノ折・南ノ折・三丁井樋

集 落

徳 万―一班・二班・三班・四班・五班



集落境の祈禱札 集落の境は、災いをもたらしさまざまな悪霊の侵入を阻止し、
歓迎すべき霊を出迎える接点である。
(福所・大般若 H13.1.21)



水路の公役 今は使われることもなくなった堀も、かつては灌漑用水として欠かせないものであった。
(快万 H10.4)

あけ)である。田植えのおりの水は堀の水に依存していたので、堀に溜まったゴミ(泥土)を掘りあげて、水量の確保をはかったのである。あわせてゴミは肥料になった。この作業は集落の全員で行うのではなく、堀の恩恵をうける周辺の耕作者で行うことが多い。

あと一つ、田植え前に行う作業で道路に砂を入れる道公役がある。舗装される前の道路は、雨が降るとぬかるんで歩行さえも困難であった。リヤカーや車力で川から砂を運び、集落内の道路に敷いて梅雨にそなえた。

村仕事への欠席は、社会生活上の義務を欠くということで、出不足金を支払ったりという決まりを持っているところもある。

(1) 公 役

2 共同作業

快 万―南組・中組(かせんさん組)・出口組・北組
 小 路―東小路・中小路・南小路・北小路
 草木田―東小路・中小路・北小路
 中 副―丁永・中新ヶ江・中副北・中副西・中副東・中副南・土井ノ古賀
 大立野北―北・南・堀内・堀外
 大立野東―中村(二班〓四班)・古川(五班)
 福 富―西の門内・中の門内・東中の門内・縄手・外町
 江 戸―東中の折・七軒屋・三軒屋・東の新地・西中の折・小屋内・西の新地
 永 里―東の折・次の折・中の折・西の折
 福島(大字新田)―東組・中組・西組
 福島(大字徳万)―東組・中組・西組(平成九年より、一班〓五班)
 福 所―東組・中組・西組(昭和四八年から東・中・西・北)
 久保田宿―一番組・二番組・三番組・五番組・六番組
 下 満―終戦時までは、西古賀と下満にわかれていた。現在は五班
 組(班)に小路・門内・小屋内・折という名称がつけられている集落は、古い形態を残しており、この単位が葬儀の加勢、行事などを行う最小組織で、茶講内(茶講中)ともいう。

(2) 手間替え

テマガイというが労力の交換である。農家にとって馬はかせぬ労働力であったが、馬を持っていない家では馬を借りて作業をしていた。人手で返す場合は一日借りれば、二日間の労力を提供しなければならなかった。

(3) 相互扶助

家同士の相互扶助や手伝いあいなどは、田植えや稲刈り・屋根の葺き替えなど、集中的に労働力を必要とする場合と、家普請のように長期間を要するものがある。

瓦屋根が普及する以前はワラ屋根であったので、定期的に葺き替えをしなければならなかった。農閑期を利用して短時間で終わる葺き替えは、多くの人手を要するため、集落の各家からコドリとして加勢をうけた。

家の新築の場合は、もっとたいへんであった。古い家の解体に始まり、石棒突き基礎工事、壁竹編み、壁土や屋根瓦用の土の用意など、既製品や電動工具など何もない時代、すべてが手作業で、半年ほどの長い期間、常時一〇人から二〇人ほどの多くの加勢人を必要としたのである。

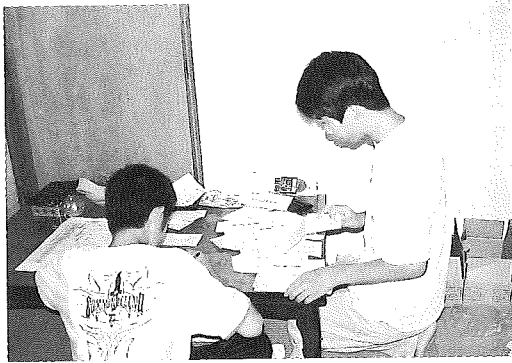
麦刈りや田植え・稲刈りなど主要な農作業でも互いに援助しあった。自家の田植えが早くすめば、例えば半日も遅れている家の加勢をした。

これらの労力提供は、次は自分が受けるかもしれないという意識が根底にあり、互いに助け合ったのである。出産や葬儀などの手伝いも、見返りを求めない相互扶助の一つである。なかでも葬儀は多くの人手を要した。役割も種々あるので大勢の協力なしではできなかった。

正月の餅つきは近所の家、何軒かがもやつて（共同）行った。一軒でするより、数軒がもやつたほうが効率がよく、新年を迎えるにあたって心浮き立つ楽しい行事であった。

3 子ども組

集落で行われる年中行事のなかには子ども仲間が主体となつて行う行事がいくつかある。若者組（のちの青年



子ども組の役割 豆祇園で集めた抜き銭やさい銭を子ども組の年長者が年齢に応じ分配する。
(横江 八幡神社の豆祇園 H13.8.5)

会・青年団) のように恒常的に組織されたものではなく、行事が行われるときに結成されるのが普通である。仲間に加わる年齢は小学校入学の数え年七歳から、一四歳くらいまでである。最年長者が大将となり、仲間を統括して行事を行った。次年の補佐役以下、新参の者まで、年齢に応じてそれぞれの役割分担をもつてあたる。行事ごとに結成されるが、毎年それぞれの行事には同じ組織がかかわり、成員は替わることが組織の集団は持続していく。子どもたちがかわる行事としては、鬼火焚き、もぐら打ち、豆祇園など、いずれも民間信仰と結びつく行事である。ほかにおくんちの浮立などに付随的な存在としてはあるが参加して、集落の重要な行事を支えている。

子ども組の行事の特徴として、大人の手を一切借りずに自分たちで

かつて衣服をととのえるのは、女性の仕事であった。現在のように衣服は買って着るものではなく、糸を紡ぎ、染め、織り、裁ち、縫うという作業をへて、ようやく家族に着せることができたのである。それだけに大切にしてきた。今日のように消耗品ではなく、破れれば繕い、また破れれば繕いを繰り返して、着られるまで着たのである。

衣食住のうち最もはやく商品として生産されるようになったのが衣服であり、衣服を調整するという仕事は家庭の仕事ではなくなった。

衣・食・住は日常の生活においてもっとも基本的な部分である。日常生活においては女性の力に負うことが多かった。女性は生産にかかわる仕事のほかに衣・食の世話をしなければならずその負担は大きかった。また、家の中の仕事だけでなく、親戚や近隣のつきあいは、ハレの日だけでなく日頃のつきあひも重視された。

(一) 衣と生活

二 衣食住

子ども組は集落における年齢序列による組織の下部組織として位置づけられ、また一種の教育期間としての役割もあった。大人たちは将来、地域社会の担い手となる子どもたちを優しくそして厳しく見守ってきたのである。近年は子どもクラブとして、父兄の指導管轄下におかれ、すべて大人が行っており、子どもたちの自主的な行動を行いくくしている。

これらの行事を子どもたちが主体となって行うということは、いずれは一人前の村人として地域社会を支えるための準備として位置づけられるものであり、子ども組の延長にある若者組への足がかりとなるものであった。小屋に泊まるというのは、神祭りにあたつての忌みごもりの生活にあたり、祭り費用の清算をして、直会をするという大人の神祭りと同じことをするのである。



豆祇園の準備 夏休みの楽しい行事の一つ、豆祇園は子どもたちだけで、年齢に応じて準備から祭りまで行う。(中副・土井の古賀 H12.8.5)